

## 第5章

# 障害のある子どももいない子どもも 育ちあう保育

### 1 切り替えのむずかしいときの保育の工夫

#### 1 気持ちの切り替えがむずかしい場面

2歳児クラスで、子どもたちの気持ちの切り替えがむずかしいと感じるのが、戸外遊びからのかたづけから、室内に入る場面です。外が大好きな子どもたち、「まだ遊びたい」「途中だったのに…」という思いもあり保育者の声かけ一つですんなりかたづけてはくれません。「ランチの時間だよ」「みんな中に入っちゃおうよ」と声をかけても納得がいかず、いつも最後まで残ってしまうのは同じ子どもです。「もっと遊びたい」「かたづけたくない」など気持ちを聞いて納得するまで遊びに付き合ったり、遠くで見守りながら本人が納得して行動するまで待つ方法をとったりするときもありますが、保育者の数が足りないときはそう待ってもらえない現状があります。そうになると、いつも責められるのはかたづけをして部屋に入れた子。切り替えができるか、できないかで自然と優劣ができてしまっていました。

## ② 気持ちの切り替えの工夫

そこで、もっと楽しく戸外遊びから室内への切り替えができるような工夫を、と考えたのが外から室内へ向かう動線に、プレイマットの階段、すべり台、トンネルを設定し、アトラクション感覚で部屋へ向かう方法でした(写真5-1)。声かけをするとすぐに興味を示し、順番を競って中に入ろうとする子もいれば、一列に並んで、または手をつなぎ友達と一緒に向かうことを楽しむ子もいました。楽しくなり戻ってもう一度やろうとする子もいましたが、いつもより断然早く室内に入ることができました。

また、別の日の活動ではおかたづけの声かけをしてから、テラスで手遊び、絵本のコーナーをつくりました(写真5-2)。手遊びをしながら子どもたちをひきつける保育者と、戸外でかたづけを促しながら絵本コーナーに誘う保育者と役割分担をし、子どもたちの関心を少しずつ室内に向ける工夫をしました(写真5-3)。手遊びに気がつき、徐々に子どもたちが集まると、保育者と子どもたちの楽しそうな声に園庭で遊んでいる子も少しずつ気になりだし、最終的には全員が自分から靴を脱いで室内へ向かうことができました。ここでは、みんなで絵本を見たあとに、今日の戸外遊びの振り返りとして子どもたちの話を聞き、これからの活動について伝えることもでき、一つの活動に区切りをつけ、次の行動に見通しをもてるなど、メリハリがつくという利点もありました。



写真5-1 「トンネルくぐってGO!」



写真5-2 「何か楽しそうだな?」



写真5-3 「おへや行きの電車でーす!」

さらに、みんなで製作したダンボール電車を活用し、遊んでいるお友達をどんどん集めテラスを駅に見立て、電車で室内へ誘導していくような遊びも試してみました。電車がくると自然と「乗りまーす!」と遊んでいたものをかたづけ、笑顔で乗り込んでくれました。1回で素直に降りない子もいますが、何回か電車ごっこを楽しむと満足して室内へ向かうことができました。

どの試みでも共通していたのは、工夫をしたことでみんなが笑顔で室内へ向かうことができたことです。声かけだけのときには、涙を見せたり、納得のいかない表情で室内へ入ることもあった子どもたちでしたが少しの工夫で、楽しかった気持ちを損なうことなく室内へ気持ちを向かせることができました。かたづけをして遊びをおしまいにするという行動を、ほかの遊びに移るといった行動に置き換えることで子どもたちは納得して行動の切り替えができました。

もう一つ実践したのが、園庭の子どもたちが大好きな砂場の横に砂でつくったものを置いておけるスペースをつくったことです(写真5-4)。砂場には、カップやお皿、プレートなどつくって遊べる道具がたくさんあります。そこで子どもたちは砂や葉や木の实を使って料理をつくること楽しむのですが、かたづけになるとせっかくなつくった料理を壊さなければならなくなり、がんばってつくったものを壊すのに抵抗がある子もいます。壊すのではなく、とっておけば、また続きができると楽しみにつながり、かたづけにも納得して取り組んでくれました。約束通り、午後にも遊ぶ時間を設け満足すると、スムーズにか



写真 5-4 「まだ遊びの途中です」

たづけ室内へ向かうことができました。

また、保育所では小さいころから異年齢の子どもと、きょうだいのように過ごしてきたという背景もあり、2歳児にお手伝いとして1歳児のかたづけや、室内に入る手助けをお願いすることもありました。2歳児といってもまだ下の子をみることに興味のない子もいれば、1歳児といっても「何でも自分でやりたい!」という子もいるので個人差があり、うまくいく子といかない子がいましたが、お手伝いの大好きな子が多く、お手本となってくれる2歳児の姿がみられました。

### ③ 時間の配分の見通しがもちづらい子どもへの対応

それから、1人の女の子と戸外遊びで密に接するうちに、戸外遊びの時間が漠然としていて、その子のやりたいことを一通りやる時間配分の見通しがもちづらいようであることに気がつきました。そのため、彼女にとっては急に遊びの終わりが告げられ、やりたいと思っていた遊びを存分にできず、不完全燃焼のような状態が室内に入れられない原因だったようなのです。

そこで遊びに出た際に「今日は何をして遊ぼうか」と彼女に問い、「砂場とかくれんぼ」などと具体的な計画を聞きだしておきます。砂場がひと段落するところを見計らい、「次はかくれんぼしようか」と声とかけ、遊びに没頭していたら「あともう少しでお部屋に入る時間になるけれど、ほかにやりたいことはないかな」と途中で確認するようにしました。また、没頭すると周りが見えな

くなる性格のため、周りで始まった遊びがあれば「あっちでしゃぼん玉やってるよ」「鬼ごっこやってるね」となるべく周りの状況を伝えるようにしてみました。

するとかたづけの時間になってから、「あれをやっていない!」「あれもやりたかった!」ということがなくなり、少しずつ、彼女なりに時間の見通しをもち、冷静に遊びを選び、時間内で満足できるようになっていきました。ここでは、じっくり子どもと向き合い、その子が困っていること、やりにくいと感じていることは何かを知ることが切り替えをしやすくするヒントになりました。子どもたち一人一人、性格や個性があるので子どもに合わせた工夫も大切だと感じています。

### ④ かたづけの時間を子どもたちと相談して決める

子どもが納得するまで遊ぶという観点では、戸外遊びの終了の時間を子どもたちに決めてもらったこともあります。数字に興味も出てきているので、時計の針が何をさしたら部屋に戻ろうか、子どもたちと相談して決めます。保育者の都合で設定された時間では、納得がいかないこともあります。自分たちが納得して決めると、自然と時間を気にして時計を見に来る姿もみられました。

また、2つの選択肢を与えて選ばせる方法をとるときもあります。たとえば「部屋に入りたくない」と動かない子どもに「これからお部屋で楽器遊びをするのと、リズム体操をするのとどっちにする?」という言葉かけをします。これは保育者の誘導問題ですが「部屋に入らない」という選択でなく、楽器とリズム体操のどっちにするという選択で必然的に部屋に入るという結果になるよう誘導する質問をします。本人が決めたということにより、気持ちの切り替えとなり室内に入ることができた例です。次の行動を自分で決めたということが、見通しをもつ結果となり、切り替えられたようでした。

さらに子どもが満足するまで遊べる時間を確保するため、いつもの保育時間にとらわれず、早い時間に順次戸外へ遊びに行くことも試しました。保育者同士連携がとれていれば子どもが全員集まっていなかったとしても、戸外で安全に遊べる環境をつくることができます。子どもが満足できる時間が確保できれ

ば、ひとつの遊びに対し、遊びこむ姿、そこから遊びの広がりもみられます。満足するまで遊んだ子どもたちは、かたづけの時間になってもスムーズに切り替えをすることができました。満足するまで遊ぶという観点では戸外遊びの時間もただ自由に遊ぶだけでなく、保育者が鬼ごっこや、かけっこなど思いきり体を動かしてみんなで楽しむ機会をつくるなど、集団遊びを設定することも大切にしています。みんなで一つの遊びを共有することで満足感が得られ、スムーズに室内に入ることができました。

冒頭で述べた通り、かたづけの声かけで切り替えができないのはいつも同じ特定の何人かです。ほかの大多数の子どもたちが声かけだけで室内に入ることができたため、自然と少人数の子どもたちに注意が向き、保育者は切り替えができない子に個別に対応したり、諭すことが多くなっていました。しかし、今回の試みで切り替えができない子だけでなく、クラス全体を巻き込み、みんなが気持ちよく切り替えができるようになる方法を探ることで、切り替えのしづらかった子を含むすべての子どもたちの行動が変わったのを感じました。保育者の工夫しだいでクラス全体の行動の切り替えがよりスムーズになることを学びました。

今回の実践を学びとし、誰もが過ごしやすく、行動がしやすく、切り替えがしやすい保育を心がけていきたいと思いました。

## 2 こだわりはどう関わるか

大勢の子どもがいる保育の現場では、いろいろなことに「こだわる」子どもたちと出会います。「こだわり」というと困ったこと、なくさなければならないことのように思うかもしれませんが、しかし、「こだわり」とは本当に困ったことなのでしょう。「こだわり」を困ったことととらえる前に、「どうしてその子はそのことにこだわっているのか？」ということを考えてみる必要があります。「なぜかそのことが気になる」「そのことをしないとどうしても安心できない」「どうしてもそのことをやらずにはいられない」など、子どもが「こだ

わる」には何かしら理由があるはずです。大人の都合で「こだわるから困る」と考えるのは、子どもの立場や気持ちを無視した対応なのかもしれませんね。

### ① 「こだわり」への対応その1 【もっといいことあるかもよ】

#### 事例1

Aくんは入園の受付時、母親が保育者と話すために椅子に座ろうとすると、奇声をあげて嫌がりました。立っているときに嫌がることはなく、少し離れたところで興味をもった遊具で遊んでいるのに母親が椅子に座ろうとすると「きゃー」などと大きな声をあげて母親の側に戻り立ち上がらせるのでした。仕方なく母親と保育者は立ったまま入園相談を行いました。そんなAくんだったので、入園してから自分の思い通りにならず、「きゃー」などと大きな声を上げることがありました。

冬、子どもたちは雪遊びをするのにスノーコンビ（雪遊びのときに着る上下つながった子ども用のスキーウェアのことで、「つなぎ」とか「ジャンプスーツ」などともいうようです）を着て外に出ていきます。Aくんはスノーコンビを着ることや手袋をはめることを嫌がりました。みんなが身支度をして外に出ていくのに、Aくんはスノーコンビを見ると大声で泣きます。母親が準備してくれたアンパンマンの手袋も決してはめようとはしませんでした。水点下の戸外に出るのに服のままでは寒いです。保育者は何とかスノーコンビを着せようと、毎日羅起になりました。なぜAくんがそれほどまでにスノーコンビを着ることを嫌がるのかわかりませんでした。登降園のときにはスノーコンビを着ているのに、遊ぶときには嫌がるのはなぜなのかも。

何も着ないで出て行こうとするAくんを止めて、泣いても無理に着せたり、スノーコンビを着なければ外にいけないうようにドアを締めてみたりしました。しかし、どうしても服のまま外に飛び出してしまうのです。雪遊びは楽しいのか一人で雪をとってなめたり、雪のなかを走り回ったりしていました。もちろん寒いので、長い時間外にいることはできません。結局、鼻水を垂らして部屋に入ってくることになるのです。

## 4 みんなが過ごしやすい環境構成

保育所、こども園、幼稚園には一人一人個性をもった子どもたちが集団で生活をしています。そのなかには友達に手が出てしまう子や不安な気持ちで涙を流す子、こだわりが強かったりする子もいます。その子どもたちは保育者にとって手のかかる子どもとして位置づけられてしまうことが多くあります。保育者は一生懸命声をかけ対応しますが、何とかしなくてはという気持ちが先走ってしまい、子どもには伝わらず、気持ちの距離ができてしまいなかなか現状を変えられずにいます。

### ① 子どもの立場に立って考えてみる

そこで、子どもの立場に立って考えてみるとどうでしょう。「先生は何を言っているんだろう?」「どうしてこわい顔をしているんだろう?」と言葉だけでは伝わらないのかもしれないかもしれません。また、行動が落ち着かず手が出てしまうのは、そうせざるを得ない環境になっているのかもしれないかもしれません。または何か満たされない思いがあり、子ども自身どうしたらいいか困っている状況なのかもしれません。そこで、ありのままの子どもの姿を受け入れ、子どもの立場になって考えた環境づくりをしていくことが大切になってきます。

### ② 見通しをもてるように関わる

4月の入園、進級当初は特に不安な気持ちで登園する子が多くいます。「今日は何をするの?」「いつママに会えるの?」と先が見えずにいることが一番不安なのです。そこで1日の生活の流れを絵や写真で表し、見通しをもてるようにする必要があります。見通しをもてることで、「次は外で遊べるぞ」「もうすぐママに会えるな」と安心して過ごせるようになります。1日の流れは文字だけでなく絵や写真を添えることがポイントです。文字を読めない子も理解しやすくなるからです(写真5-5)。



写真5-5 1日の生活の流れがわかるボード



写真5-6 時間の見通しをもてる時計

遊びに夢中で次の活動への切り替えが苦手な子もいます。そんなときも見通しをもてるように関わるとよいでしょう。登園したら保育者と一緒に今日の1日の流れを確認し、苦手な集団活動にも少し参加してみようという約束をしたり、どんな遊びをしたいか個別にスケジュールを決めたりします。やりたいこと、がんばることが明確になるため、気持ちの切り替えがしやすくなります。また、かたづけの際、保育者が急に「おかたづけだよ」と声をかけてしまうと、遊びが遮断されたことで気持ちの整理がつかずにパニックになってしまったりすることもあります。そこで時計を使って、遊ぶ時間を目で見てわかりやすくします。数字が読めない子でもわかるように時計に子どもたちが親しみやすいマークを貼り、遊びの前に「赤い針がうさぎさんに来たらおかたづけだよ!」を子どもと約束します。時計は移動できるもので、外で遊んでいても見えるところに置いておくといよいでしょう。時間を意識しながら遊べるようになり、次の活動への切り替えもしやすくなります(写真5-6)。



### ③ 身支度やものの管理

園生活のなかでは、身支度やものの管理を自分でできるようになります。保育者が「制服たためようね」「お道具箱の中はきれいにしようね」と声をかけますが実際にどうすればいいのかわからず困ってしまう子どももいます。そこで、見てわかるように写真を活用するとよいでしょう。服のたたみ方、整理された道具箱の写真を用意しておくことで、真似をして始末しようとする子どもの姿がみられるようになります。また、身支度のときは鏡を用意することで襟を整えたり、靴下を伸ばしたりと自分の身だしなみを整え始め、すると友だちの姿も気になるようになり、ふだんから子ども同士で身だしなみということに気を遣えるようになります(写真5-7)。



写真5-7 鏡で身だしなみチェック

### ④ かたづけ

遊び終わったあとのかたづけはどうでしょうか。何をどこにどうやってかたづけたらいいか一目でわかるようにするのも写真を活用するとよいでしょう。かたづける棚の中やカゴの側面に写真を貼ることで、子どもたち自ら主体的にかたづけをするようになります。

生活のなかでは手洗いをすることが多くあります。「順番に並んでね」と声をかけますが、子どもたちは列がたくさんありどこに並んでいいのかわかりにくい状況です。そこで、順番というルールがわかりやすいように床に足型マーク

を貼ります(写真5-8)。



写真5-8 順番がわかる足跡

### ⑤ 行事の取り組み

行事の取り組みでも、目で見ることでわかりやすく参加できるようになります。たとえば、運動会の組体操やパラバルーンではこれからどんなことをするのか興味をもてるように、一つ一つの完成形の写真を保育室の中に掲示しておきます。興味をもった子から自然と練習をし始め、次々にほかの子も加わっていきます。集団での練習がむずかしい子も気持ちが向いたときに写真を見ながらいつでもどこでも練習することができます。目で見てわかりやすくすることにより、子どもたちは安心感や意欲をもち、自信につなげることができます。

### ⑥ 遊びの環境

遊びの環境はどうでしょうか。子どもの興味、発達に合ったものを用意しても、配置によっては集中できなかったり、落ち着かず飽きてしまったりします。そこで、棚やパーテーション、机などを使って空間を分け、遊びのコーナーをつくります。ここは電車で遊ぶ場所、制作する場所などと、子どもたちは遊びを選びやすくなり集中して遊びこむことができます。友達との関わりが苦手な子どもも好きなコーナーで遊ぶことで、少しずつ周りの友達に目が行くようになり、一緒に遊ぶ楽しさを感じることができます。それから、友達とケンカをしたりして気持ちが落ち着かないときに一人になれる場所を用意して

おくことも大切です。一人になることで気持ちが落ち着き、切り替えやすくなります。保育室の外に隠れ家のような場所をつくり、ロフトで友達の間配を感じながら過ごせるようにするのもいいでしょう(写真5-9)。

登園してすぐは調子が乗らずに静かに過ごしたい子どももいます。そんな子どもにはじゅうたんを敷き、ソファを用意し、家庭的な雰囲気の中でゆったり過ごせるコーナーがあるとよいでしょう。空間が広すぎる場合は天井に天蓋をかけ、ほどよいこもり感ができるようにします。ソファで保育者と一緒に絵本を読んだり、会話を楽しんだり、じゅうたんでゴロゴロすることができ、安心して自分の居場所になっていきます(写真5-10)。

活動のなかで保育者が「集まってね」と声をかけますが、子どもたちにとってはどこでどのように待てばいいのかわかりづらい状況です。そこでじゅうたんを敷いておいたり、テーブルで丸い囲みをつくってみたり、椅子を並べて置いたりし、集まる場所をわかりやすくします。集団が苦手な子には、小さな座布団やマットを用意し、少し離れたところから参加できるように配慮するとよいでしょう。

食事のときには、ふだん使っている机にテーブルクロスを掛け、花を飾るだけで部屋の雰囲気を変えることができ、楽しい食事の時間を過ごすことができます。



写真5-9 気持ちを落ち着ける場所



写真5-10 家庭的な雰囲気でゆったり過ごせる空間

## 7 過ごしやすい環境づくり

目の前にいるすべての子どもに目を向け、子どもの困っている姿があったときこそ自分の保育を振り返り環境の見直しをするチャンスです。少しの工夫ですべての子どもが安心して生活を送り、主体的に取り組み、自信にもつながります。常にいろいろな場面にアンテナを張り、みんなが過ごしやすい環境づくりへの意識を高めていくことが育ちやすい保育へ結びついていくのではないのでしょうか。

【参考文献】

久保山茂樹「まるっと1年マンガでなるほど気になる子の保育」メイト、2017

## 5 みんなが参加できる行事

幼稚園の1年にはいろいろな行事があり、それぞれの行事を大まかな日程とともに年間行事として保護者に伝え、準備を進めます。行事の進め方は、保育者が設定し、それを練習して行うという方法はとっていません。子どもたち主導で行えるように、子どもたちとともに話し合い「やりたい!」と思えるような活動になるように、必要に応じ保育者が“しかけ”ながら進めていきます。子どもたちに負担のないように進めていくため、楽しみながら当日を迎える子どもたちの姿がみられます。一つの行事の活動期間は1、2週間～1、2か月と様々ですが、全員参加できるように一人一人の子どもが力を発揮して、考え・話し合い・つくり・描き・歌い・踊りいろいろな活動を織り交ぜながら進めていきます。保育者も、子どもたちの思いを実現するために必要な手助けをする(しかける)者として参加しています。

活動に自主的に加わることのできない子どもたちもいますが、そんな子どもたちもそれぞれの個性を発揮しながら活動に参加し、仲間とともに活動することの心地よさを感じられるように配慮しています。ほかの子どもたちもその子